第１章　時空間情報科学にかかわる哲学的試論

１．はじめに

本プロジェクト研究は、そのテーマに「時空間情報科学を用いた」と謳われているなかで、私は、共同研究メンバー諸氏のようにこの最新情報科学を駆使する技術力を持ち合わせていないことをまず告白しなければならない。それゆえ西洋古代思想史研究者として、たとえばアウグスティヌスの過ごした紀元４世紀から５世紀の北アフリカの状況をヴィヴィドに描き出す時空間情報科学的図版を自分の力ではどうしても構成することができないなど歯がゆい思いをする者である。しかし、私に求められているのは一哲学者として、この時空間情報科学の人文科学における位置づけについての考察であり、刷新されるべき歴史研究はどのような焦点を結ぶべきものであるかについての省察である。これこそまさに手に余る難問であるが、ソクラテスのひそみに倣って、わかっていないことの自覚に身を置きながら、本当の理解（＝知恵 sophia）をどこまでも大切にしてこれに親しむ（philein）という哲学フィロソフィア（philosophia）の精神をもってこの「時空間情報科学」ないし「歴史研究の刷新」にかかわるかかわりそのものの原理的な問題に関して、本プロジェクトを通じて得られた観点について簡潔に論じていきたい。

２．科学的知識として

時空間情報科学はそれが「科学」である限り、「いつ・どこでも・だれが・どの見地から・どのように」用いても、その知識がもたらす知見そのものはデータ（data＝与えられたもの：与件）として共有される、という点をまず押さえておきたい。「だれが、どのように」ということがクローズアップされてくる「語りに基づく人文学（Narrative based Humanities）」をひとまず括弧に入れて、あくまでも「証拠に基づく人文学（Evidence based Humanities）」の立場に立ってこれを遂行するということである。その際の文献資料の批判的吟味や考古遺物、古生物学的証拠（花粉や年輪）および炭素同位体同定法それぞれの評価の仕方等に関しては、厳密な上にも厳密な精査がなされねばならないことは言うまでもないし、それがいかに困難であるかは想像に余りある。しかしこの問題には立ち入らない。「いつでも、どこでも」ということは、逆に言えば、それ自身の座標軸をもってその中に位置づけられているということである。すなわちこちら側の立場を離れた「だれにとっても」の事象の姿が、時刻 t1における物体の位置 p1のプロットを集積する形での三次元空間ないし時間も含めた重層的な座標軸の中での形象化されるということである。それを可能にするベースには、デカルト・ニュートン・ライプニッツらによる近代の数学の革新とりわけ解析幾何学と微積分法があると言えよう。そうだとすれば本来的には「いつ・どこでも・だれが・どの見地から・どのように」用いても、それは知識としてわかるものでなければならない。情報科学を〈用いる〉困難はリテラシィーの問題としてはあるものの、その成果として明らかにされることは科学知識として、筋道立てて考えれば知性的に納得できるものでなければならない。IT 技術はこの知識の直観化に大いに寄与するものであるが、「情報化」することがこのような近代的知識の本質に何かを付け加えるものであるとは私には思えない。

絶対時間・絶対空間の座標軸の中でのプロットされる歴史的な過去の姿は、対象としてこれを見ている認識の主体としての私の向こうに浮かび上がるものである。本プロジェクトの狙う時空間情報科学を用いた歴史研究の刷新は科学としてどこまでも冷徹非情に貫徹されるべきであると私は考える。

例えば、古代世界はロマンとしてあるのではない。かえって刷新された岡山の古代歴史研究では、自然とそのなかで当時の生産性や文化水準の制約の下むき出しの人間たちの有様として身の丈で暮らしていた古代吉備人の事実を直視するということである。

そしてこれを現代ないし近未来的に応用するとすれば、例えば、現代岡山の日本の中での社会経済文化史的な位置取り、そこでの高等教育機関岡山大学の来し方行く末についても冷徹非情に実相を見抜くものとならねばならない。このような科学的批判的な観点を確保するものとして、「吉備から中国シルクロードローマ帝国を展望する総合的な古代学研究センター」のような自立的で小粒でもぴりりと辛い魅力ある国際研究施設が大学院も付設した形で存続できるとすれば、本プロジェクトはその礎を築くものと言えるであろう。

3．生きられる空間・生きられる時間

前節で押さえた本プロジェクトの特徴は、歴史を対象として突き放して観察・考察するというアプローチであるが、私がさらに考察を進めたいのは、そのような時空間情報科学が実はベースとしながらも、これを近代科学的な視点確立のために敢えて括弧に入れている時間や空間のとらえ方そのものの問題である。先ほどいみじくも「自然の中で身の丈で暮らした古代吉備人」と言ったが、その「身の丈」から見えている彼らの時間空間がどういうものであったか、これを浮かび上がらせる手段としてわれわれの時空間情報科学の手法が用いられないかということである。ここでの「時間空間」は「時空間情報科学」の時間空間ではなく、生きられる空間・生きられる時間としての身体のあり方に根ざしたものである。メルロー・ポンティのいう身体図式のことを想起してみればわかるように、ここで言う身体性とは、「こなたからかしこへ」あるいは「かしこからさらにかなたへ」というように、身体の配置を下に脇、手前、向こうそして背後というように知らず知らずの布置を持ちそのような「空間」を生きているものとしての身体のことである。哲学の伝統に照らしてみれば、「場所」（西田幾多郎）とか「風土」（和辻哲郎）が想起されようし、新しいところでは、風景の持つ「空間の履歴」（桑子敏雄）といった観点から人間の有様をとらえ直すことが重要になってこようかと思われる。これは「時空間情報科学」が鮮やかに描き出す三次元俯瞰図の上にプロットされる人間とは視点を異にする。しかし完全に切れてしまって、かたや実証的な事実科学かたや人文主義的な解釈学というように分断されてはならない。なぜなら、単なる思い入れを込めた描き出し（歴史像・人物像）は厳密な科学によって事実上是正されようし、また科学の知見から機能論的に説明できる個々の人間の振る舞いも多々あるからである。むしろ両者は連なるものとしてそれぞれの時代に生きた人々の境涯を内的に理解する方途としなければならない。ここでは「証拠に基づく人文学（Evidence based Humanities）」と「語りに基づく人文学（Narrative based Humanities）」との連携が図られねばならないのである。アナール派以来着目される「心性（mentalité）」研究はともすれば平板なものとなっているきらいがあるものの、私が求めるのは「物語り論（Narratology）」的な考察を注意深く導入することである。それは思想とかイデオロギーになる以前の人間学的な思考法を見て取ることを求める。例えば、方角の価値観をデータから読み取ることなどが挙げられよう。北上、南面、西方浄土など。またオリエンテーション（orientation）（＝キリスト教では東向きに建てられた教会において洗礼式の際西に位置するこの世に背を向けて東に向き直る正しい方向付け）。あるいは天地人という秩序の把握などなど。その際に、このような名称が与えられて概念や思想（thought＝考えられたこと）として成立しイデオロギーとなったものから解釈するのではなく、思想となる以前のこのような身体位置を生きる身の丈に生きた人間に得られた人間のあり方として受け止めるということが目指されるべきである。それ

が時空間情報科学のデータ上どのように浮かび上がってくるか、いわば客観と主観を媒介するきめ細かい「構想力（Einbildungskraft）」が必要とされているのである。

4．しかし何がわかるのか

先に私は、科学である限りわかるものでなければならないと主張した。そのわかり方は「いつ・どこでも・だれが・どの見地から・どのように」用いてもそれ自身は変わらずその通りであるものとして覚知されるということである。この知識の規定はプラトンのいう恒常普遍の姿を示すイデア(idea)の知識（epistêmê）に影響されすぎてはいまいか、という批判があるかもしれない。近代科学の成果はそのような恒常普遍性を要求するものではなく、時点 t1における事象のいわば切片をしっかりと切り取るものでありその以上でもそれ以下でもないとされるのはけだし当然である。しかし、時空間情報科学が捉えようとする対象が、身体をもって生きた人間であるのでそこに固有の難問が潜んでいる。すなわち、それは変化する事象を対象ということにとどまらず、本来的にこれを研究するこちら側の人間もやはり同等に身体性を持った変化の中に位置する人間であるということが、対象そのものの把握に微妙に反映・共振するという事柄である。

われわれは虚心に図版や風景を眺めているときあたかも自分が目だけになったように対象をくまなく観察しこれを心に刻みつけたりデータとして記録する。微積分法や解析はこれを量的にも確固としたものとする(この点は古代中世人には思いも寄らない進歩であると言える)。しかし、プラトンが『国家』篇で取り上げる「三本の指の例」はなおもわれわれに事柄の難しさ・不思議さを示唆する。その中での登場人物ソクラテスは対話対手に、小指・薬指・中指の三本を凝視するように促す。彼が言うには、指が指である限りその三本はどれもそれが端にあろうが真ん中にあろうが太かろうか長かろうが同じく指として現れる。しかし他方、それらの指の大小については端と真ん中で現れが違うではないか。太い細い堅い柔らかいについても触覚ははっきりそれ自身を捉えることができるだろうかと疑問を投げかけ、本当の意味での知性的な把握が必要であることを説いている（『国家』第7巻523C-524D)。短い記述なので解釈を要するが、つまり、小指・薬指・中指の三本のうち真ん中の薬指に注視したとき、中指を隣に見たときは「それは短い」が小指を隣に見たときは「それは長い」。そうであるので薬指を凝視してもそれは長短については何も教えてはくれず、かえって薬指それ自身は「長くもあり短くもある」という正反対の事態のうちに沈み込んでいるではないかという、いささか神経症的な思考実験である。ここには振り返って、われわれが知る・分かっているということについての思いこみが暴き出されている。例えば「比べて分かるじゃないか」と議論を断ち切るとすると、つまりそこには「比べてみてその通り現れていることをそのまま知識とする」という前提、つまりそれぞれにとってそれぞれの観点に現れたことがそのまま知識であるとする、いわゆる「人間尺度説」の前提が巣くっていることが気づかされるという仕組みである。

これに関してさらに省察を加えると、われわれは名辞によって何であれ事象を概念化して把握して「何が何であるか」を理解する。「これは指だ、これは斧だ、などなど」。しかし、比較や程度を含む「長い・短い」「少ない・多い」「暖かい・寒い」「貧しい・富んでいる」「正しい・不正である」といった事象をそれ自体としてとらえるすべを持っているのであろうかという謎に直面する。もしこれらの事象をそれ自体として把握する知識を持っていないならば、例えば、本質的にこのような増減変化する比較様相を含む「少子高齢化」、「地球温暖化」、「貧困格差」、「平等」や「正義」といった重大な事柄についてわれわれはいかほど理解していると言えるのであろうか。これは重大な問いかけである。プラトンのイデア論の発想の原点が、ソクラテスの裁判と刑死にあることは言を俟たない。彼にとって

「われわれの知りえたかぎりでの当代の人々のうちで、いわば、最も優れた人の、そして、特に知恵と正義においてもっとも卓越した人」(『パイドン』118A（岩田靖夫訳)）としての最期を遂げたソクラテスが、同時に当代の人々からは正反対のいわば「もっとも不正・不敬虔極まりない人物、得体の知れぬ〈知恵〉を売り物にして若者を堕落させる人物」として死刑に処せられてしまったという体験があった。ここでは同じソクラテスが正しいと同時に正しくない、優れていると同時に劣悪であるとされる。これを原体験としてそこから理論的精査されていったのが、善のイデアに収斂するイデア論的思考である。むろん理論としてのイデア論はプラトン自身も気づく難点をもっておりこれを持ち出せはすべてが解決するというものではない。ただひとまずは、歴史家は知識を尽くして事実を明らかにしたとしても、さらにいまここにおいては知識として確固とした形で過去であれ現在であれ人間の有様を把握してはいないのではないかという哲学的留保が必要ではないかと言うことにとどめたい。

5．時と永遠

さてここまで考察してみると、時間についても不思議さがわき上がってくる。人間は生涯を通じてある一定の時間を生きている。歴史研究はとりわけ時間に向き合うものである。しかし、このことについてわれわれは何が分かっているのであろうか。すでにアウグスティヌスは次のように述べている。

> ではいったい、時間とは何でしょうか。だれも私にたずねないとき、私は知っています。たずねられて説明しようと思うと、知らないのです。しかし、「私は知っている」と、確信をもっていえることがあります。それは、「もし何ものも過ぎさらないならば、過去の時はないであろう。何ものもやってこないならば、未来の時はないであろう」ということです。ではこの二つの時間、過去と未来とは、どのようにしてあるのでしょうか。過去とは「もはやない」ものであり、未来とは「まだない」ものであるのに。また現在は、またもしいつもあり、過去に移りさらないならば、もはや時ではなく永遠となるでしょう。ですから、もし現在が時であるのは過去に移りさってゆくからだとすれば、「現在がある」ということも、どうしていえるのでしょうか。それが「ある」といわれるわけは、まさしくそれが「ないであろう」からなのです。すなわち、私たちが本当の意味で「時がある」といえるのは、まさしくそれが「ない方向に向かっている」からなのです。（アウグスティヌス『告白』第11巻14章17節（山田晶訳））

前節で私は、身体性を持った人間が直面する生きた現実が本来的にそれ自身としては捉えがたい位相を呈していることを指摘した。これはアウグスティヌスによれば、時間の下に生きている被造物としての人間と自然の本性と切っても切れない事柄であるとされる。「過去が既に無く」「未来が未だ無い」ということだけではない。普段われわれは空間の中に自分も事物も「ある」と前提しているが、この「ある」を受け止めると「現在」いう時間もそれ自身は「ひろがり（spatium＝スペース・空間）を持たない限りなく「無いもの」と言わざるを得ないのである。これはわれわれの把握がつねに分散したもの（distentio animi）とならざるを得ないことに起因するとされる。このように時間空間に生きる人間の生はいかにも悲哀に満ちたものである。では、いかなる知識いかなる知恵がわれわれを満たすのであろうか。いずれにせよ科学はこれを突き放しつつも寄り添っていかねばならないと思われる。

以上、「時空間情報科学」をめぐる考察を通じて、私は歴史研究が科学であると同時に人間に定位した優れた語り（narrative）の文体を持つべきであるとした。それには思いこみを排して分かっていないことへのソクラテス的留保としてのフィロソフィアを分かち合うべきであると考えたのである。